

## 平成11年度特殊資料展

# 天草・島原の乱

### 【出品目録】



平成11年10月30日(土)～11月1日(月)

熊本大学附属図書館



### 公開講演会

講師 熊本大学文学部教授 吉村 豊雄氏

演題 細川家と天草四郎

日時 平成11年10月31日(日)13:30～15:00

場所 附属図書館会議室(2F)



一揆勢の切支丹幟（1 頁—No.2）



原城本丸の「四郎家」（1・2 頁—No.3）



## 1. 有馬城攻図 1枚

整理番号 45印 55番

寛永15年（1638）2月27日・28日の原城攻防戦の様を描いたものである。天保11年（1840）の作成と推定される。絵図の裏には「三」と朱書されているが、この漢数字には意味がある。細川家では有馬陣の諸局面を立体的に俯瞰しうる8枚の「大木図」が作成されていたようである。現存していないが、この木図には幟・馬印・井楼などのミニチュア（立組）を配置し、8枚の木図をそれぞれ箱に入れ、これらは継ぎ合わせると「合図」となる壮大なパノラマ図となっていたようである。そして天保11年には木図の変色、立組の破損・散逸を考慮して、別途8枚の木図を写し取った紙図と、8枚の木図の立組を図録化した「島原本図幟馬印之図」（No2）を作成している。本絵図の裏の漢数字「三」は、3番目の箱の木図を紙図に描いたものであることを示しており、「島原本図幟馬印之図」の「三ノ箱ノ内立組」の図と対応させてみるとよく理解できる。本丸を中心に点在する朱書の漢数字は、「島原本図幟馬印之図」に図示された立組の番号であり、幟・馬印が多い。立組には14本の切支丹幟、5本の切支丹白木が存在する。細川勢は、2月27日に漢数字「三」近くの池尻門より突入し、占拠部分に柵をめぐらして夜を明かし、翌28日早暁から本丸の掃討に入る。益田弥一（市）右衛門は本丸に一番乗りし、陣佐左衛門は天草四郎の首を討ち取った人物として知られる。本丸の外に一揆勢の武器が散乱している。一揆勢が「大木・大石・礮磨・鍋・釜、其他色々の物を落とし、煎砂・熱湯・糞土をかけ、篷の類に火をつけ投出し、それをのかれて堀越に働く面々ハ鎧・長刀にて突落し、必死に成て防候」（「綿考輯録」巻47）という状況がうかがえる。そして目につくのは、海上の異様な異国船である。「島原本図幟馬印之図」に「異国船二艘」とある。オランダ船を描いたものであろうが、大分誇張されている。正確には原城攻撃に参加したオランダ船は1艘であり、2月27日・28日の総攻撃段階にはすでに長崎に戻っている。（138.0×50.9cm）

## 2. 島原本図幟馬印之図 1冊

整理番号 4, 5, 198-1

細川家では天保11年に8枚の「大木図」を紙図にし、立組を図録化した「島原本図幟馬印之図」を作成している。その際に、この「島原本図幟馬印之図」は、8つの箱の「大木図」の立組（ミニチュア）を、箱ごとに図示し、本図と、紙図の双方に漢数字で番号を付し、紙図のどこに立組が所在するかを漢数字で示している。「一之箱ノ内立組」から「八ノ箱之内立組」まで、立組がまことに色鮮やかに描かれている。描かれた立組は幟、馬印、井楼、番小屋、竹束、番船、切支丹幟、切支丹印シ白木、将棊頭、釣鐘、吹貫、石火矢などであり、富岡城の櫓もある。「島原本図幟馬印之図」は従来ほとんど利用されていないが、史料価値は大きく、さらに、8枚の紙図の1つである「有馬城攻図」（No1）と対照させてみるときわめて有益である。（30.8×22.2cm）

## 3. 原城諸手仕寄之図（「綿考輯録」巻55所載）

整理番号 106, 6

本絵図は、幕藩軍による原城攻囲の最終的態勢を描いたものである。原城に向かって、ほぼ中央部の「ナベシマ セイロウ」（鍋島井楼）の前面に位置する仕寄の柵列の一部が朱色で描かれ、「夜打ニヤフル」と書かれているように、寛永15年2月21日の一揆勢の夜討ちによる柵破壊の状態も図示している。本絵図は、文字通り同年2月27日・28日の原城総攻撃直前段階の幕藩軍の攻囲態勢を描いたものといえる。作図の力点は本丸の一角に明示した「四郎家」の存在にあるが、「綿考輯録」という、藩主に進覧する細川家の家譜だけに、小絵図ながら、原城の攻囲態勢が正確に描写され、柵列、竹束、井楼、築山、石火矢台などによる仕寄方式が詳細に描かれている。

ところで、本絵図の特色は、何とんでも細川氏の家譜「綿考輯録」に綴じ込まれた絵図であること、

そして、原城本丸の一角に「四郎家」を描いていることである。細川勢は、幕藩軍による原城攻撃の2日目、寛永15年2月28日の早暁、焼け尽くされた本丸の一角で、天草四郎の「家」（「四郎家」）を発見し、この家を焼き払って、「四郎首」をとる。細川勢は、「四郎家」を火矢で焼き払うに際して、幕府上使に通報するが、このことが上使による「四郎首」確定の根拠となる。その意味で、「四郎家」の存在は、細川勢による天草四郎討取りの状況証拠となるが、全国的に数多い原城攻囲図には、原城本丸に「四郎家」など存在せず、細川家においても、「綿考輯録」以外の絵図では「四郎家」の存在を考慮していない。絵図上の「四郎家」はあくまでも細川家の家譜に限定された存在といえる。つまり、家譜（綿考輯録）の編纂過程（宝暦2年—天明3年）において、藩主忠利の書状に頻出し、天草四郎討取りの証拠ともなっている「四郎家」の所在が問題となり、編者たちが、忠利書状の検討を通して場所を推定し、「四郎家」を明示した本絵図を同書に綴じ込み、家譜の記述に対応させたものといえる。（30.8×43.4cm）

#### 4. 有馬城攻図 1枚

整理番号 45印 65番

細川家が幕府に提出した有馬城攻図の写しであり、「江府被差上絵図之写 肥州高来郡原城之図」、「正徳三年二月朔日濃州森鹿流毛利牛右衛門可長写之」との書き込みがある。描き方は全体に簡略であるが、城全体をかこっていた塀を太く赤色で明示している。絵図の主眼は、幕藩軍の本陣と仕寄場の大まかな存在形態と、細川勢を中心にした原城総攻撃の攻防を描くことにある。細川氏の陣所の前進状態、益田弥市右衛門ら「本丸一番乗り」を競った家臣たちの乗込み口を示し、これを迎え撃つ一揆勢幹部の配置状態を描いている。（88.4×66.7cm）

#### 5. 肥前国有馬城之絵図 1枚

松井文庫 4011

きわめて精巧な絵図である。近世後期の作図であろう。全体的な構図はNo3「原城諸手仕寄之図」と似ているが、細かく見ると違いも多く、格段に精妙である。幕藩軍の陣所は、各大名陣小屋の点在状態を色分けして描き、仕寄場の柵列も精巧を極めている。大井楼、井楼、石火矢台、築山の所在も明確である。本丸で注目されるのが、諸図に描かれている張り出し部分が石垣で囲まれ、原城の天守台を想定させることである。また、「原城諸手仕寄之図」の「四郎家」に相当する一角に、その存在を意識したような描き方をしている。（128.6×151.7cm）

#### 6. 有馬城攻図 1枚

整理番号 14, 12, 26

包紙には「有馬之絵図」と書かれている。作図の目的は、藩主忠利が、一揆終結後、幕府から軍令違反、あるいは一揆への対処についての落度を問われた3人の幕府上使衆（長崎奉行榊原職直、幕府使番松平行隆、豊後府内目付牧野成純）を弁護するためのものである。寛永15年2月27日の原城総攻撃における3人の上使衆の原城二ノ丸への乗込み状況を図示している。一揆終結直後の作図と見られる。（26.9×41.5cm）

#### 7. 有馬御陣御本陣図 1枚

整理番号 212, 22の1

#### 8. 肥前有馬御陣之節 御陣小屋図 1枚

整理番号 8, 4, 39丁

#### 9. 有馬御陣御本陣図（仮称） 1枚

整理番号 106, 5, 58

原城攻囲時の細川氏の陣所の地割図。No7の絵図は天保11年に写図したもので、原図は不明。中央の藩主の御座所を側組の家臣が固め、本陣全体は竹垣で囲まれている。後の2点の絵図の内、No9「有馬御陣御本陣図」（仮称）は、本陣を描いた大きな絵図であり、裏書に「旗本陣取此陣屋之懸様、和田伝兵衛・矢野勘右衛門心得居申也」とある。No8「肥前有馬御陣之節 御陣小屋図」は、その写しである。出陣諸大名の本



陣は現在の国道線上に原城を攻囲する形で並んでいた。細川家の本陣は、原城の北方、浦川の海岸近くに位置する。(71.7×75.0cm、147.0×185.5cm、32.0×46.6cm)

#### 10. 松倉家家老多賀主水等書状写 1通

松井文庫 3848

島原藩松倉家家老衆が、熊本藩細川家の年寄（家老）衆に対して、島原表における一揆蜂起を知らせた第一報である。日付は寛永14年10月27日であり、同月25日の一揆蜂起から3日目に当たるが、一揆勢は松倉勢を追って島原城を攻め、城下を焼き、城近くに出没していた。落城の危機を感じた松倉家の家老衆は近隣諸藩に対して「加勢」を求め、細川家にも助勢を乞うた。しかし、当時の武家諸法度は大名の「隣国」への加勢を禁じており、「凡人数5、6千程」の一揆勢はさらに拡大していく。(16.7×49.4cm)

#### 11. 富岡城代三宅藤兵衛書状写 1通

松井文庫 3852

唐津藩富岡城代三宅藤兵衛が、熊本藩細川家年寄（家老）衆に対して、天草表におけるキリシタン蜂起について知らせた第一報である。松倉家からの第一報から2日遅れの寛永14年10月29日付であるが、大矢野ほか小村2、3ヶ所でキリシタンが立ち帰ったことを察知したのは、2日前の10月27日である。島嶼部という地理的制約から情報収集も遅く、事態への危機認識も薄い。(33.1×47.9cm)

#### 12. きりしたん立帰一揆起申村々人数之事 1通

松井文庫 3855

島原領における村ごとの一揆参加者を書き立てたものである。従来、この種の資料は、「松倉記」など調査時不詳の数値が利用されていたが、本文書は寛永14年11月7日付と時期も明らかであり、一揆蜂起後10日余りの時点での一揆参加状態を示している。恐らく島原に派遣された細川家の家臣が松倉家から聞き取ったものであり、永青文庫の「御家中文通之内抜書」にも収載されている。この文書によると、10月25日に蜂起した島原領の一揆は、島原領の南部（南目）一帯に拡大し、島原城下の南方の深江村から布津・堂崎・有家・有馬・口ノ津・加津佐・串山の各村は一揆参加率100%であり、これらの村々の周辺の村で一揆参加の百姓と藩側に味方する百姓、様子を見る百姓との対立がみられる。このように、島原領の一揆は寛永14年11月上旬には、南目地域に拡大するが、同時に作戦的に手詰まりとなり、11月中旬には天草一揆と本格的に合流し、行動目標の重点を天草に移す。(30.8×118.8cm)

#### 13. 諸触状之部 1冊

整理番号 8, 1, 131

細川家の3人の年寄（松井興長・有吉英貴・米田是季）が天草・島原一揆に際して、組頭を通して家中に出した触状集である。一揆蜂起直後の寛永14年11月2日付触状から、一揆終結後の寛永15年7月11日付のものまでを収める。(26.2×19.8cm)

#### 14. 上使之御衆御宿誘御賄御帳 1冊

整理番号 12, 23, 66

板倉重昌、松平信綱ら幕府から派遣された上使衆のための、領内宿々および有馬における休宿・接待の設備・道具のリストである。寒中ゆえ「こたつ」・「置いろり」などが含まれている。(26.6×21.2cm)

#### 15. 城中談合人 1通

整理番号 14, 12, 21

3ヶ月間原城に籠り幕藩軍と対峙した一揆勢の組織・持口を書き立てたものである。類似の史料は多く、本文書が有江（有家）村の談合人の1人の名前を不明のまま「今壺人」としているのは、幕府上使松平信綱の家臣長谷川源右衛門の留書「肥前国有馬高来郡一揆籠城之刻々日記」に所載されている生捕りの一揆勢

幹部・山田右衛門作の供述と一致している。本文書の中に、「八百之大将 口ノ津ノ山田右衛門作」と具体的に記述されていることも、本文書が右衛門作の供述をベースにしていた可能性もあることをうかがわせる。右衛門作は生捕られて1ヶ月後の口書では談合人の名前をすべて書き出しており、本文書は、一揆終結直後、山田右衛門作ら生捕り人、落人の取り調べで判明したことを勘案して書き立てたものとも推測される。内容は、①「城中之談合人」、②「八百之大将 口ノ津ノ山田右衛門作」、③「軍奉行」、④「城中牢人」、⑤城内各持口の人数・村名からなり、一揆勢の組織とある程度対応した内容となっている。本文書の外題ともなっている「談合人」のほとんどは村役人層（庄屋・乙名）であり、必要に応じて「談合」し、村ごとに城内の各部署に配置される百姓勢を統率したようである。(18.2×173.9cm)

## 16. 城中役付（「綿考輯録」巻58所載）

整理番号 106, 6

原城に籠る一揆勢の軍事組織を書き立てたものである。本文書は、原城の陣場に派遣された熊谷忠右衛門が、寛永15年正月15日付で熊本留守居の年寄（家老）米田是季に報告したものである。「右の分ニ承候間、立ながら相調進上申候」と書いているように、幕府上使衆あたりから公表された「城中役付」を書き取って国元に知らせたものである。上使衆は恐らく落人の供述を勘案して作成したものであろう。「城中役付」のメンバーは牢人を主体としたものと思えるが、地名、村名を冠した者も多い。これら「城中役付」のメンバーと「談合人」（庄屋・乙名）との関係はよく分かっていない。また、通常天草四郎時貞1人の名前が掲げられている「本丸惣大将」の位置に、出丸大将とかけ持ちの有江監物時次が配されている。(30.9×21.8cm)

## 17. 籠者之覚（「御家中文通之内抜書」所載）

整理番号 10, 11, 41

知行方奉行沖津作太夫が、寛永14年12月6日付で天草・島原一揆に関係して捕縛し、入牢させた者を書き立てたものである。籠者の人数は熊本の本籠・新質屋に47人、飽田郡・益城郡の在籠に9人である。熊本の籠者の大部分は、(天草)四郎の類縁者・関係者として捕縛された者たちである。そのきっかけとなったのは、寛永14年10月30日に、天草一揆の中心人物渡辺小左衛門が熊本藩領宇土郡浦で捕縛されたことである。小左衛門は、捕縛直後の宇土郡奉行による仮取調べにおいて、熊本藩領に潜入した目的を、宇土郡江部村庄屋次兵衛の隣に住む四郎の母・姉・妹を天草に連れ戻すためだと自供する。渡辺小左衛門の自供から、小左衛門・瀬戸小兵衛の一行のほかに、宇土郡江部村の「四郎一類」、小左衛門の「宿主」となった宇土郡浦の九郎右衛門の一類、宇土郡江部村庄屋次兵衛の一類が捕縛され、入牢させられて吟味を受ける。藩当局は、四郎の在所・すみかを特定し、四郎の母・姉・妹をはじめ、これだけの関係者を吟味しながら、天草四郎なる人物の実相には迫りえていない。(27.2×20.4cm)

## 18. 幕府上使落人取調べ書付 1通

整理番号 101, 62

幕府上使板倉重昌・石谷貞清による、寛永14年12月25日付の落人取調べ書である。上使2人の名前は墨で抹消してある。落人の証言は出陣諸大名・家臣の書状などに所載されているが、本文書のように取調べにあった上使の名を記した一紙物の調書はきわめて珍しい。本文書で取調べられた落人は、60歳近くの島原領小有馬（有馬北村）の雅楽助と、17、8歳の天草上津浦の者であるが、特に有馬北村の雅楽助の調書は諸記録に所載されており、落人証言の中でも検討に値するものである。雅楽助の証言で注目されるのは、天草四郎に関する証言であり、「大将ハ四郎と申候て、年十五六ニ罷成候、かしの毛あかく御座候、本丸ニ罷有候、此度取詰候て以後、一度二ノ丸迄出申候由、彼四郎親五十余りにて、同意ニこもり申候由也」とある。「大将」四郎の頭髮が赤いという驚くべき供述をしている。また、四郎が「一度二ノ丸迄出」てきたとも供述している。「一度」・「二ノ丸迄」という限定のされ方は、逆に四郎が実際には一揆勢の中に全く



姿を現すことはなかったことを想定させる。一揆勢の前に全く姿を見せなかったことから色々と憶測を呼び、「ていうすの再誕」として、「赤毛」の四郎をイメージさせたものとも考えられる。

## 19. 一揆勢の矢文 1通

整理番号 14, 12, 19

原城に籠城する一揆勢からの矢文である。矢文は領主側史料に所載され、信憑性に問題があるが、この矢文にはある程度の真実味を感じる。すなわち、この矢文は（寛永15年）正月13日の日付で「城内」から「御上使様御中」に宛てて出されているが、この時期幕府上使松平信綱は矢文を通して一揆方の言い分を聞くポーズを示すとともに、原城砲撃のためオランダ船を呼び寄せており、矢文はこうした幕府方の動きに反応して出されている。矢文は、まず籠城の目的は「国家」を望んだり、「国守」に背くことではなく、キリシタンの宗旨を守るためであるとする。しかるに、海上に「唐船」が見えるが、これは、「日本之外聞」にかかわるのではないかと、上使衆の行動を嘲笑する。(36.6×51.4cm)

## 20. 四郎母・渡辺小左衛門申口書付（「綿考輯録」巻49所載）

整理番号 106, 6, 1-49

## 21. 投降勧告状 1紙

整理番号 14, 12, 19

幕府上使松平信綱・戸田氏鍬は、寛永15年正月22日、細川氏のもとで入牢中の四郎母・姉、渡辺小左衛門ら10人を原城の陣場に呼び寄せ、まず直々に吟味する。No20は、細川家の吟味奉行乃美市郎兵衛・町市之允による四郎母・渡辺小左衛門の取調べ書である。四郎母は、「四郎時貞年ハ十六歳、九ツノ年より手習三年仕候、学問五六年程仕候、四郎長崎へ節々参学問仕候、京大坂へハ不参候、四郎九月晦日ニ大矢野へ参候而、宿ハ小左衛門弟所ニ罷在候、小左衛門弟ハ四郎姉聳ニ而御座候」と供述している。四郎が寛永14年9月晦日に大矢野に渡ったとすれば、一揆の直前まで宇土郡江部村にいたことになるが、それにしても何とも曖昧な供述である。ついで上使は、城中の一揆勢と矢留（休戦）の申し合わせをしたうえで、2月朔日と同8日、「四郎おい」（四郎姉の子、8歳）小兵衛を城中に送り、投降と非キリシタン・ゼンチョ（異教徒）の解放を呼びかける。No21は、その際に、上使方と一揆方で取り交わされた5通の書状である。すなわち、①渡辺小左衛門・瀬戸小兵衛から渡辺伝兵衛・会津七右衛門・（瀬戸）理右衛門・（渡辺）佐太郎に宛てた2月朔日付書状、②四郎母また・同姉れしいなから、ますだ甚ひやうへ（益田甚兵衛）・同 四郎に宛てた2月2日付書状、③渡辺伝兵衛・会津七右衛門・瀬戸理右衛門・渡辺佐太郎から瀬戸小兵衛に宛てた2月朔日付書状、④渡辺小左衛門・瀬戸小兵衛から渡辺伝兵衛・会津七右衛門・瀬戸理右衛門・渡辺佐太郎に宛てた2月4日付書状、⑤また・れしいなから、ますだ甚ひやうへ・四郎に宛てた2月4日付書状、以上の5通である。まず、①②③の3通が第1回目の交渉の時の書状である。一揆方から出された③は①に対する返状で、四郎の甥小兵衛が2月朔日の夜に原城を出る際に持たされており、①と③は、上使側と一揆側で確実に書状のやりとりがなされたことを示している。②は使者に立った小兵衛から一揆方に渡ったのかどうかもはっきりしない。甚兵衛・四郎からの返事もない。内容的には、①では、天下の政道としてキリシタンは許されないが、無理にキリシタンにさせられた者、前々からのゼンチョ（異教徒）はその罪を問わない、「大將四郎」も周りの者から動かされているだけで、城を出てくれば赦免する用意がある、とする。これに対し、③では、城を落ちていくものにはかまわないが、城中の衆は天守様に身命をささげる覚悟が出てくると上使側の投降勧告を拒絶し、徹底抗戦の意志を示す。次に④⑤は上使が再度2月8日に小兵衛を城中に送った際に持たせたものであるが、幕府上使松平信綱の家臣長谷源右衛門の記録「肥前国有馬高来郡一揆籠城之刻々日記」によると、日付は2月4日ではなく、ともに2月8日付であり、④は渡辺小左衛門から渡辺伝兵衛に宛てられている。④は内容的にみて渡辺小左衛門から父渡辺伝兵衛に宛てられたものである。また、④⑤両書状とも2月8日付とみるのが妥当である。上使側は再度ゼンチョ、非キリシタンの解放を求

め、甚兵衛・四郎からの返事を期待している。とくに④では、甚兵衛・四郎からの返事を求め、矢留をしたうえで、矢狭間からでも姿を見せよと求めている。結局、益田甚兵衛・四郎は、四郎甥小兵衛が上使方の使者として2度城中に入りながら、身内である小兵衛の前にも姿を見せず、返事も持たせていない。上使が矢狭間からでも四郎に姿を見せよと求めているのは、この眼で四郎の姿を確認したいという思いと、一向に姿を現さない、返事も出さない「大将四郎」が、本当に城中に存在しているのだろうか、という上使側の疑念を感じる。結局一揆側からは④⑤に対する直接の返事はなく、使者の小兵衛にNo23の返事まがいの書付を持たせている。(27.4×19.8cm)

## 22. 四郎法度書 1通

整理番号 14, 12, 19

本文書は、「益田四郎 ふらんしすこ」が、寛永15年2月朔日付で、原城内の一揆勢に対して出したとされる「法度書」を、後に復元したものである。「四郎法度書」なるものの存在が初めて明らかになるのは、一揆終結後、藩主忠利が江戸留守居衆に宛てた寛永15年3月27日付書状（「綿考輯録」巻49）であり、「きりしたんの四郎法度書出候間、是亦写懸御目候事」と申し送っている。つまり、「四郎法度書」が出てきたということで、忠利はその写しを作成し、江戸に送っている。同様の写しを江戸にいる父忠興（三斎）にも送っている。「四郎法度書」がどういう経緯で表に出てきたものか明らかでないが、恐らく、幕府上使衆が生捕った一揆勢を取り調べるなかで「四郎法度書」の存在をつかみ、供述をもとに法度書の体裁に復元したものと推測される。ただ、「四郎法度書」は、細川氏所伝の本文書以外に対応する史料もなく、史料としての信憑性に問題もあるが、先の忠利書状からみて城中においてこれに近い法度書が作成されていたことは確実である。また、「(寛永15年) 2月朔日」という日付はそれなりの蓋然性を有する。すなわち、No20・21文書でみたように、幕府上使松平信綱は、熊本から四郎母・姉、渡辺小左衛門らを前線に呼び寄せ、寛永15年2月1日、「四郎おい」の小兵衛を原城に送り、一揆指導部に対し、無理やりキリシタンにさせられた非キリシタン、ゼンチョ（異教徒）の赦免を約束し、解放を求める。こうした領主側の動きに沈黙する四郎は、同じ2月朔日付で「四郎法度書」を出し、動揺する一揆勢に対し、自らの意志を示したものと見える。四郎は、城中の者たちに対し、この城中に籠っている者は、神の御慈悲をもって、救いの「御人数に被召抱」れている。そのご恩に報いるには、単に祈りを捧げるだけでなく、自分たちの持ち場を油断なく固めるなど神に「奉公」することが肝要だと説く。同時に命令に従わない者は命を失うことになるかと恫喝している。この法度書は、つまるところ、一揆勢に対し、神への奉公＝徹底抗戦による「天上」か、「地獄」(＝落命)かを迫り、「総大将」たる「益田四郎」への絶対服従を強いたものと見える。幕藩軍による揺さぶりや軍事圧力のなかで、一揆指導部が、「益田四郎」の名をもって、「くつろきの見」える一揆勢をひきしめ、城内の管理統制態勢を強めたのは十分考えられることである。(30.4×105.0cm)

## 23. 籠城一揆勢からの返書 1通

整理番号 14, 12, 19

本文書は、一部象形文字を使い、細川氏側が解説のために振り仮名を付けており、まず読下し文をつける。平仮名書きの部分を適宜漢字・片仮名に直した。

城山の梢は春の嵐かな

ハライソかけて走る叢雲

恥ずかしく候へ共、涙を水にして、心を墨にすりしるし申候、  
サンタマリア様、サンチアゴ様、ミゲル様、イナショ様、フランシスコ様、  
みなもろもろ、ベアト様の御力をもって、一筆申上候、必ず必ずハライソ



にては合い申すべくと存じ候、ともかくもデイウスの御計らい次第に候、

渡辺佐太郎 千

瀬戸小兵衛様

尚々申し上げ候、ともかくも御あるじ計らいのままに候、

いずれ様に御心得頼み申し候、 以上

本文書に日付はないが、幕府上使松平信綱の家臣長谷川源右衛門の留書「肥前国有馬高来郡一揆籠城之刻々日記」所載の同文書には2月8日との記載がある。「刻々日記」によると、四郎の甥の小兵衛が2月1日に続いて再度原城に入り上使側の説得工作を伝えるが、一揆側は、本文書を小兵衛に持たせ、送り返す。本文書は、上使の再度の説得工作に対する一揆方の最終返答となるが、内容的に具体性はなく、ただひたすら殉教を願う心情がつづられている。渡辺佐太郎は渡辺小左衛門の弟とされる人物である。上使は城中への説得工作を断念し、翌2月9日、四郎母・姉、渡辺小左衛門らを熊本に戻す。(33.5×48.0cm)

## 24. 有馬二而之奉書 1冊

整理番号 10, 7, 17

「奉書」とは、惣奉行（奉行）が藩主の命令・指示を書き留めた冊子である。「有馬二而之奉書」と題する本文書は、藩主忠利が原城攻めの前線に着陣した寛永15年正月26日から、同年2月29日までの在陣中の忠利の命令をまとめたものである。たとえば2月9日の条をみると、忠利が幕府上使松平信綱の意向をうけて、前線に呼び寄せた渡辺小左衛門、四郎母・姉らを熊本に戻すように指示している。(29.8×21.4cm)

## 25. 嶋原御陣被召仕候御浦舟御帳 1冊

整理番号 12, 23, 86

本文書は、浦奉行林勘左衛門・井上加兵衛が代官頭阿部弥一右衛門に対し、有馬陣の島原渡海用に徴用した浦舟について、寛永15年4月11日付で、郡別に舟の規授、借用料、船主を書き上げたものである。熊本町をはじめ飽田・玉名・益城・八代・芦北・詫磨の各郡から総数615船が徴用され、借用料として銀42貫282匁が支払われた。浦舟は12～14端帆、300石前後の比較的大型のものから、3枚帆、4枚帆の漁船まで根こそぎ動員されている。(27.3×21.2cm)

## 26. 河尻大渡町鍋屋仁右衛門先祖之事 1冊

整理番号 4, 5, 116

No25「嶋原御陣被召仕候御浦舟御帳」によると、熊本城下の鍋屋三郎右衛門は、10～13端舟の大舟5艘を供出しているが、本文書によると寛永14年11月、三郎右衛門は熊本留守居年寄（家老）の米田是季の求めに応じて、当時上方から鍋屋のもとに細川家の蔵米購入のために来ていた旅船36艘を藩の輸送船に充てている。(25.9×18.3cm)

## 27. 藩主忠利軍令書出し 1通

整理番号 101, イ24

藩主忠利は、原城総攻撃が間近かに迫った寛永15年2月24日、3通の軍令を出す。本文書はその1点であり、物頭の下知による行動、陣場の火用心、敵は切捨て、高名無用など、全軍に規律ある行動を求めている。(33.5×49.1cm)

## 28. 細川忠利自筆原城本丸攻め小絵図写（「綿考輯録」巻40所載） 整理番号 1枚 106, 6, 1-40

藩主忠利が、江戸留守居衆に宛てた寛永15年3月22日付書状のなかで、同年27・28日の原城本丸攻め、とくに2月28日の一揆勢の掃討状態を自筆で描いたものである。「諸手寄合切支丹ころし候丸」（出丸）が事

実上一揆勢最後の場となる。原文書は本渡市立天草切支丹館蔵。(27.3×19.7cm)

29. 於有馬城一番乗り・二番乗、其外勝たる手働之衆書付 1通 整理番号 14, 12, 27

細川家は、原城総攻撃において、本丸一番乗り、「四郎首」討取りの軍功を立てるが、細川家内部において、とくに本丸一番乗りをめぐる熾烈な対立が生じる。本文書は、今回の「勝たる手柄」を吟味した7人の奉行が、寛永15年5月3日付で年寄（家老）・備頭の松井興長・有吉英貴に吟味の結果を報告したものである。本丸一番乗りは益田弥市右衛門ら6人が主張するが、幕府上使松平信綱が益田弥市右衛門の指物を目撃し、藩主忠利も「弥一右衛門海手のはやきのりこみの証拠人之多きものにて候」（「綿考輯録」巻49）と述べているように、証拠人の多さが益田弥市右衛門の一番乗りを決定づけている。吉田十右衛門は、細川勢が2月28日早暁本丸で発見した「四郎家」に火矢を放った忍びの者であり、陣佐左衛門は「四郎家」から出てきた人物を討取る。陣佐左衛門討取の首級が「四郎首」と認定される。(31.7×92.5cm)

30. 有馬城ニ放火仕者之覚書 1通 整理番号 14, 12, 19

幕藩軍による原城総攻撃で最も威力を発揮したのは城内の焼払いであり、一揆勢は最終的に本丸下の出丸方面に追いつめられる。本文書は、寛永15年2月27・28日の原城総攻撃の各方面において、「放火」の武功を立てた家臣を吟味し、年寄（家老）の松井興長に提出したものである。本丸の焼討ちには、本丸一番乗りを競った益田弥市右衛門・都甲太兵衛の類縁者がおり、また忍びの者の吉田十右衛門は「四郎家ニ弓火矢仕、焼立」てた人物として知られる。(31.2×73.7cm)

31. 肥前有馬城乗働之御帳 1冊 整理番号 8, 1, 84

寛永15年2月27・28日の原城総攻撃における松井興長指揮下の家臣たちの働きぶりについて、筑紫大膳ら7人の吟味奉行が吟味し、同年4月28日付で書き立てたものである。「三丸一番乗と申者」、「本丸石垣着」、「本丸一番乗と申者」、「二月廿八日働」などに分けて書き立てられているが、冒頭の凡例に、「一、朱点あい申候ハ証拠あい申候分、朱之丸星ハ証人申分少違申分、無点へ働無之分、証人も無御座候分」と記されているように、「働」と書き立てられるには、確かな証人を伴った相応の武功を立てる必要があった。なお、「本丸一番乗と申者」には、益田弥市右衛門、津川四郎右衛門、河喜多九太夫、山田新九朗、早水市郎兵衛、都甲太兵衛、後藤権右衛門、池永源太夫の8人が書き立てられている。(32.4×23.8cm)

32. 陣佐左衛門軍功書付 1通 松井文庫 3432

寛永15年2月28日、原城本丸において一揆勢の総大将天草四郎を討取ったとされる陣佐左衛門が、翌2月29日に年寄（家老）の有吉英貴に差し出した軍功書付である。その中で「本丸にて首を三ツ打取申候内、壱ツハ四郎首にて御座候」と天草四郎を討ち取ったことを明言する。佐左衛門はこの功により新知1000石を与えられ、鉄砲20挺頭となる。(30.9×22.7cm)

33. 益田弥市右衛門証言書付 1通 松井文庫1377

「本丸一番乗り」として知られる益田弥市右衛門が加藤安太夫の本丸乗込みを証言したものである。弥市右衛門は、「私儀ハ乗込、敵ニ相申迄者見方壱人も見不申候」と、自分が本丸一番乗りだとしたうえで、加藤安太夫は、自分が敵1人を鎧で突いたところを見ているので、安太夫の本丸乗込みは間違いないと保証している。150石取の益田弥市右衛門は本丸一番乗りの功で1000石を加増され、鉄砲20挺頭となる。(30.2×41.7cm)



34. 三才（斎）様へ天草原城之事言上仕タル書扣 1冊

整理番号 8, 1, 125

35. 志方半兵衛言上覚 1冊

整理番号 4, 5, 58

両者は、同一の内容であるが、前者には、末尾に在府中の忠興（三斎）、が八代留守居に宛てた書状を載せている。志方半兵衛は、八代城に隠居している細川忠興（三斎）の4男で、忠興が隠居家督の相続を予定している細川立允の「家老」であり、本文書は、当時52、3歳であった半兵衛が立允に従って天草・島原陣に赴いた従軍記録である。一揆終結後の論功行賞の過程で、本丸一番乗りをめぐって、熊本（細川本家）と八代が対立した。藩主忠利は、「八代ハ何事ニも格別」として、細川家の論功行賞から立允の八代勢を切り離し、寛永15年5月朔日に志方半兵衛を出府させ、立允・八代勢の働きぶりを「詳に言上」させた（「綿考輯録」巻49）。「志方半兵衛言上之覚」は、これを1冊にまとめ八代の忠興及び熊本に提出したものである。本書は、同じ忠興家臣の諏訪猪兵衛に宛てた書状を中心に、老練の軍事感覚で一揆勢の動向を伝えており、史料価値は高い。とくに、諏訪猪兵衛に宛てた寛永15年12月29日付書状において、落人の取調べ結果を報告したなかで、「四郎ハ本丸の内ニ寺を立、其寺ニ居、すすめをなし申候由」と申し送っているのは、原城中における天草四郎の存在をうかがわせる数少ない史料である。（27.3×19.8cm、26.0×18.2cm）

36. 有馬城乗之時立允公御乗被成候御道筋之小絵図（「忠利公御家譜」附録・坤、所載）

1枚 整理番号 7, 6, 3-19

寛永15年2月27日の原城総攻撃における細川立允（忠興4男）の仕寄場から本丸にいたる城乗りの道筋を描いたものである。立允は自分の軍勢の「本丸一番乗り」を主張し、本家の論功行賞に不満を示す。細川家の家譜編纂においては、立允勢の動きも細かく記述し、本絵図を家譜に綴じ込み、後の宇土支藩に配慮している。（26.9×20.1cm）

37. 手負討死目録 1通

整理番号 14, 12, 26

38. 肥前国有馬城乗之刻手負討死名付之帳 1冊

整理番号 12, 23, 71

前者は有馬陣における細川家の手負・討死人数目録である。目録の前半に、藩主忠利が、寛永15年3月朔日付で幕府上使松平信綱に報告した、2月27・28日の原城総攻撃の手負・討死人数を示している。だが、この人数が総攻撃直後の調査で誤りがあったため、改めて年寄（備頭）の松井興長・有吉英貴が、組ごとに「誓文」を付して有馬陣全般の手負・討死者を提出させ、同年5年3日付で藩主側近の坂崎内膳を通して忠利に報告している。報告の詳細が、No38「肥前国有馬城乗之刻手負討死名付之帳」である。討死は、知行取90人、切米・扶持取200人、都合290人であり、手負は、知行取465人、切米・扶持取1663人、都合2128人であり、討死・手負の家臣は総数2418人に及ぶ。（36.3×116.3cm、30.2×23.6cm）

39. 有馬戦死安國寺石碑面名前写 1冊

整理番号 12, 23, 38

熊本の太平山安國寺は、有馬陣の戦死者の追福法事が営まれた寺であるが、ここには多くの有馬陣戦死者が葬られている。本文書は、安國寺に葬られた細川家の家臣128人、陪臣181人の石碑の名前を書きつけたものである。細川家臣の中には、尾藤金右衛門、嶋又左衛門、岩越惣右衛門、小坂半之允ら大身も含まれている。陪臣は松井興長、有吉英貴ら重臣の家臣である。（26.0×18.8cm）

40. 有馬御褒美之面々子孫之覚 1冊

整理番号 12, 11, 40

藩主綱利代の元禄8（1695）年3月に、有馬陣で褒美を受けた家臣の子孫の相続状態を調査したものであ

る。たとえば、「大将四郎首」を討取り、新知1000石、鉄砲20挺頭という格別の褒美を受けた陣佐左衛門の場合、佐左衛門病死後、嫡子吉太夫は父の跡式を相続するが、「不首尾」を理由に知行を召上げられ、30人扶持を与えられている。その際に、弟の半右衛門、佐次右衛門にそれぞれ新知200石が与えられている。

(27.6×20.6cm)

#### 41. 籠者之覚 1通

整理番号 101, 38

#### 42. 籠者吟味伺書 1通

整理番号 101, 37

一揆終結直後、熊本で入牢させられている者たちの処置に関するものである。No41は、寛永15年3月4日付で藩主忠利の意向を伺ったものである。「上使へ進之候」「ゆるし可申候」「長さきより之返事次第」など、忠利の自筆の指示が書き込まれている。No42は、忠利が同年3月6日付で、幕府上使松平信綱・戸田氏鋌に籠者の処置について指示を仰いだものである。文書上側の付札が上使衆の指示である。この日、熊本で入牢させていた者のうち、瀬戸小兵衛一類、四郎の母・姉・妹・甥などは原城の陣所で処罰され、大井楼に晒されており、忠利は残る籠者について指示を仰いだものである。籠者のうち「四郎親甚兵衛下人」の弥右衛門は、主人である甚兵衛・四郎について肝心なことはなにも供述できず、上使も処置を細川氏に任せている。また、渡辺小左衛門の「宿主」となった宇土郡郡浦の九郎右衛門は「心ハきりしたん」であることを供述し、家族全員死罪とされる。なお、天草四郎の在所とされる宇土郡江部村の庄屋次兵衛一類は忠利の判断で全員赦免され、上使へ伺いを立ててはいない。庄屋次兵衛などは、隣に住んでいたという四郎およびその家族について最も客観的に供述できる立場にあったであろうが、結局、藩当局は在所の庄屋からも具体的な供述を引き出しえていない。宇土郡江部村にいたという四郎と天草四郎なる人物との間には、人為的な乖離を感じる。(16.9×210.5cm、30.7×92.6cm)

#### 43. 有馬御陣二付御人数兵糧米請払御算用目録 1冊

整理番号 212, 22, 2

天草・島原への軍勢派遣に要した兵糧米の請払い算用目録である。総計は米1万5800石余、大豆1680石程である。(31.4×23.4cm)

#### 44. 四郎記 3冊

整理番号 8, 1, 126

3巻からなる。作者不詳。「四郎記」と銘うっているものの、内容は、天草、島原の一揆蜂起から天草富岡城攻略にいたる一揆の顛末、一揆勢の落城の模様を中心に書いており、天草四郎についての記述に新味はない。(25.6×19.6cm)

#### 45. 山田右衛門作口上写 1通

整理番号 14, 12, 20

本文書は、一揆勢幹部の中で生き残った人物として知られる山田右衛門作の口書（自白調書）であり、比較的信憑性は高いとされている。右衛門作は、一揆勢の幹部として、領主側（とくに旧領主有馬氏）との交渉にあたっているが、口書の内容は意外に具体性に乏しい。また幹部として、大将の天草四郎とはある程度接触があったろうが、四郎に関する記述も曖昧である。取調べにあたった上使衆が、あたりさわりのない程度の自供内容を公表し、詳細を秘匿した可能性もある。(16.2×450.0cm)

(註) 本目録のうち、「松井文庫」以外の資料は、全て「永青文庫蔵細川家文書」である。